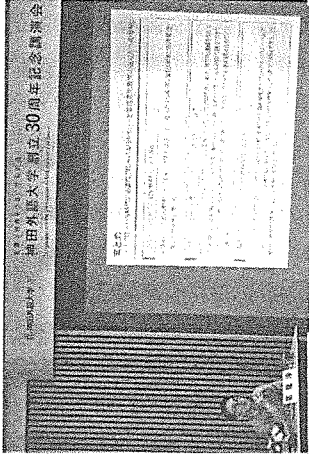


る機会の一つになる可能性もあります。つまり、グローバル化社会におけるリテラシー能力や多様な言語文化知識を習得すると同時に、グローバル人としてのアイデンティティを振り返る機会にもなるのです。今後の大学教育では、このような視点を踏まえた上で、グローバル・リテラシーの向上を実現できるような充実した教育内容を考案していくことが緊急の課題だと考えています。



講演をする高氏

二〇一七年六月三日 開催「グローバル・リテラシーとは何か: マイノリティー言語と社会の視点から考える (第二弾)」

近代後期日本における琉球諸語

パトリック・ハインリツヒ

(執筆 三ノ上 成三)

- 講演者……パトリック・ハインリツヒ (ヴェネツィア・カ・フオスカリ大学准教授)
- 司 会……サウクエン・ファン (本学国際コミュニケーション学科教授、グローバル・コミュニケーション研究所所長)
- 使用言語……英語

はじめに

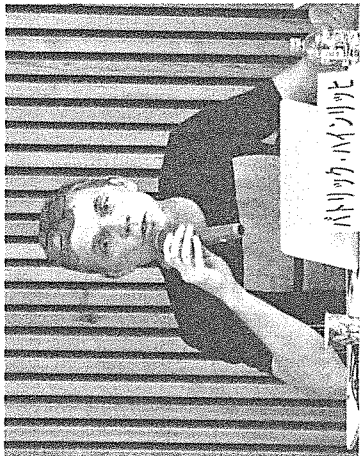
この講演では琉球諸語についてお話します。まず、琉球諸語の概要を紹介し、近代の言語生態学について触れたいと思います。それから、過去一五〇年ほどの言語使用領域内の言語シフト、また言語の喪失について少し説明します。そして、現在の琉球列島における言語の復興活動についてお話し、最後にそれらを総括したいと思います。

琉球諸語とは

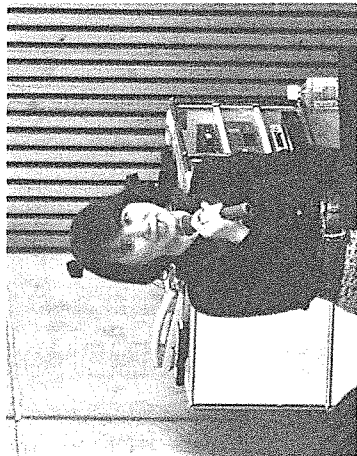
言語学者や日本国内の多様な言語について興味がある人でなければ、日本の言語状況についてあまり考えたことがないでしょう。多くの人は、日本に日本語があることは知っていますが、アイヌ語など他の言語について知っている人は多くないでしょう。しかし実際の状況はそれよりもはるかに複雑です。関連した言語としてまとめられている日本語族の構成について見てみると、最も強く大きな言語として日本語が存在しており、別の枝として琉球諸語があります。琉球語ではなく琉球諸語です。

琉球諸語はさらに、北琉球語群と南琉球語群とに枝分けされています。この二つは距離的には近いのですが、言語のつくりは大きく異なっています。そのため、北と南両方の言葉のエキスパートになることはとても難しいです。北琉球語群には三つの言語があります。一つは奄美語、一つは国頭語、そして最も大きいのが沖縄語であるりちナーグチです。南琉

琉球語群には宮古語、与那国語、八重山語の三つがあり、これらを合わせると琉球諸語には六つの大きく異なる言語が含まれていることとなります。私の友人でもある比嘉光龍(三宮 Byōryū)氏は沖縄語を使ってこのことを説明しています。興味のある方はYouTubeにアクセスしてみてください⁽¹⁾。この中で特に重要なことは、琉球諸語が六つの言語に分かれ、そこには七五〇もの方言が含まれているということです。このように、琉球諸島の言語はきわめて多様なものですが、一方で



パトリック・ハインリック氏



司会のフアン先生

日本で暮らし、日本のことをよく知っていても、このことを理解している人は多くないのではないのでしょうか。これには、イデオロギイ、すなわち国家や人、また言語に対する考え方が関連しています。例えば、私はイタリアに住んでいます。イタリアに住んでいる人はイタリア人で、イタリア語を話すということは皆さんも知っていると思います。日本語、イタリア語、韓国語など、それぞれの国には国語(National language)が存在する場合があります。このような国語によってまとめられた人々は国民(Citizen)と呼ばれ、この国民が一つの国家(State)を形成するのです。これは国語・国民・国家として知られています。しかし、これはあくまでもイデオロギイ的なものです。歴史を学んでみると、現実はこの真逆であることがわかります。つまり、先に国家が作られるのです。国家の中には必ず多様性が存在していますが、国家の中にいる人々はすべて国民として一つにまとめられます。そして、その国民に対して国語の教育が行われるのです。沖縄の人々もかつては日本語を話すことはありませんでした。一八七九年に日本政府によって沖縄県が設置されてはじめて日本語を学ぶことになったのです。

社会の近代化と言語生態系の変化

国家の形成は、言語の減少にも関わってきます。もちろん、

日本語とも関係があります。琉球諸語と日本語は近い部分もありますが、大きく異なる部分もあります。特に南の言語になるとこの違いは大きくなっていきます。

琉球諸語が日本語から分離したのは、六世紀よりも前のことだと考えられています。そのため独立した言語として存在した期間が非常に長く、また言語のシステムも日本語とは異なっているといった複数の理由から、琉球諸語のことを琉球方言と呼ぶのは適切ではないと言えるでしょう。

単に国家が作られただけで、世界にある言語の数が変わるということはありません。例として、日本における明治維新以前の状況を見てみたいと思います。このころの日本は江戸と京都が中心となっており、そこから離れば離れるほど言語や文化は多様性を帯びてきます。これは、言語や文化が人と人とのコミュニケーションの中に存在するからです。コミュニケーションが頻繁に行われる中心的な地域では、その接触の多さから人々は同じような言語を話すようになります。ところが、中心から離れた地域に行くと、人々の接触は珍しいものになり、コミュニケーションは限られた人との間で行われます。こうした地域では、独自の言語や文化が維持されることになり、それが言語の多様化につながっていくのです。

この時期において重要なのは、明確な国境というものがないということです。明治維新以前に小笠原諸島は日本だったかと聞かれると、「はい」とも「いいえ」とも答えられるでしょうし、琉球が日本だったかというのも微妙です。北海道が日本だったかというのもなかなか一言では言えません。しかし近代化によってこれらは変化し、国境が作られました。ここからここまでが日本だと明確に言えるようになったのです。こうして国家が形成されると、今度はその国境内にいる人間はすべて日本人であるとされ、日本語を話さなければならなくなりました。異なる言語や文化を持つ人たちも日本の

言語と文化を学ばなければならなくなったのです。このような状況になると、多様な言語の関係性は横の関係性から縦の関係性になります。縦の関係性とは、すなわちヒエラルキーの関係性のことです。ヒエラルキーの上位に位置するのは支配的な中心地域の言語です。日本の場合は東京と京都の言葉が混ざり合った、いわゆる標準的な日本語がこれに当たります。縦の関係性においては、中心地域から遠く離れ、言語が多様化していくと、それは悪いものとみなされるようになります。琉球諸島で暮らす人々のように、中心からひとときを遠く、標準と大きく異なる言語を話していると、問題のある行動だと判断されてしまいます。そのため人々はやがて地域の言語を話すことを避けるようになります。言語の消滅危機は、このようにして生まれるのです。現在の日本の消滅危機言語を見てみると、三つのアイヌ語、六つの琉球諸語、八丈語、小笠原のクレオール英語などが挙げられます。いずれも日本の中心では話されることがなかった言語です。

世界には現在約二〇〇の国があるのに対して、言語は七〇〇〇あります。これは計算上、一つの国に三五の言語があることとなります。しかし私の知る限り、モノリンガルである国はアイスランドだけです。現在はGoogleによって開設された「絶滅危機言語プロジェクト (Endangered Language Project)」のホームページなどで危機言語の分布を確認する

「言葉は世界をつなぐ平和の礎」を理念とするならば、すべての人が自分の望む言語を維持できるようにしなければなりません。つまり、言語やその話し手にとって、社会文化的にも政治的にもよりよい環境を作らなければならないのです。そのために、私たちは近代という時代を越えて、近代後期もしくは再帰的現代について理解する必要があります。

琉球諸語の喪失と復興

言語の消滅危機について考えるといつても、私たちは単に過去をさかのぼり、古い言語や文化を守ろうとしているわけではありません。社会をよりよくするために、また多くの人々の生活をよりよくするために、未来に向かって前進しているのです。「言語復興 (Language Revitalization)」を目指す意味はここにあります。私は長年、琉球諸語が弱くなった過程、あるいは失われてきた過程について研究してきました。これらの過程は「言語シフト」や「言語の喪失」などと呼ばれています。

日本語は、一八七二年に琉球王国が解体された時に初めて琉球列島に入りました。これは「琉球処分」と言われています。「処分」というと琉球が悪いことをしたような印象を持つかもしれませんが、実際は、武力によって侵略され、支配されていました。本格的に日本語が流入したのは、一八七九年

ことができます。この地図を見ると、興味深いのは以前シルクロードがあつたところに沿って危機言語が見られるという点です。これはかつて定住せずにそこを移動しながら暮らしていた人々が、近代化によって一つの場所に定住するようになったことが原因だと考えられます。移動する人々がいなくなったことで、それまで話されていた多様な言語が消滅する恐れが高まり、いわば言語のホットスポットとなっていることがわかります。

近代化という言葉は非常に魅力的な響きを持っています。確かに近代化あるいは近代には多くの良い点があります。しかし同時に、悪い点も多くあることを忘れてはいけません。近代化における言語について考えた時、その悪い点の一つとして私たちが「敵対的言語生態系 (Hostile Language Ecology)」と呼ぶものを挙げるすることができます。例えば、魚や植物を育てようとする時には、それらをどのような環境に置くのが良いか考えるでしょう。言語もそれと同じで、その言語を取り巻く社会的、物理的環境、すなわち言語生態系の中で成り立っています。ところが、日本やドイツ、イタリアなどの多くの国では、こうした言語生態系に対して敵対的です。国家によって国語が国民生活のあらゆる場で押し付けられるため、小さな言語は生き残ることができません。このような言語の消滅危機に関心をもち、さらに神田外語大学が掲げる

に沖縄県が設置されてからになります。それから学校教育が始まり、私が知る限り日本で最初のバイリンガル教科書である『沖縄対話』が使用されるようになりました。また、『琉球新報』という日本語の新聞の発行も始まりました。これらによって、琉球諸語の使用は次第に限定的になり、変容することもなくなってきました。現在復興されている琉球諸語は、ほぼ一九世紀に使用されていた言語のままです。現代で 사용되는ような、例えば「学期」などの言葉は琉球諸語にはありません。時代とともに言語が変容するのは自然なことです。言語の復興においても時代の変化とともに必要となる言葉への対応が求められるでしょう。

一方、琉球に入った日本語は、様々な領域において使用されるようになりました。役所から始まり、郵便局や銀行などでも使われるようになり、次第に琉球語が使用できる領域は限定されていきました。しかし、異なる場面において異なる言語が使用されること自体は、実はそれほど大きな問題ではありません。問題になるのは、家庭においてその言語が使用されなくなった時です。このような時に、言語は消滅の危機を迎えるのです。例えば、日本やイタリアにおける教育を英語で行うようにしたからと言って、日本語やイタリア語が消滅の危機に陥ることはありません。その国のすべての人が、家庭でも英語を使用しはじめた時にこそ問題となるのです。

琉球における言語シフトは一九五〇年代に始まりました。このころには琉球に住むほとんどの人が日本語話者として育っていました。もちろん琉球諸語と日本語のバイリンガルもまだ多くいましたが、そのような人たちもこの時期には高齢になっていました。琉球諸語を話す高齢者が亡くなると、その家庭や近所では琉球諸語を話さなくなっていくます。そのため、若者は日本語しか習得せず、琉球諸語はほとんど話すことができなくなります。こうして琉球の日本語へのシフトは進んでいきました。

今日では琉球諸語は、琉球の宗教であるシャーマニズムと芸事の領域にしか残っていません。現代の人々の言語使用を世代別に見ていくと、最も多く琉球諸語を話すことができるのは高齢の人たちです。「ウチナーヤマトグチ」と呼ばれる日本語と琉球語が混ざった混合語についても同様です。興味深いのは、中年の世代がより標準的な日本語を話すことが多く、若者世代の方がこの混合語を話しているという点です。若者世代の間では、知っている琉球諸語の言葉を標準日本語に混ぜてよく話しているようです。例えば「汚い」という意味の琉球諸語である「はごーさん」と日本語とを混ぜて「はごい」と言っています。面白いのは、彼らがこのような言語使用を意識的に行っているわけではないということです。若者たちは「はごーさん」という言葉自体を理解しているわけではありません。

持っている考えよりも、文部科学省の考えの方が影響力が強いでしょう。通常は強い影響力を持っている立場の人の考えが政策として実行され、結局はその立場のイデオロギイが実現することになります。ここから抜け出すためには、権力のシフトを起こし、マイノリテイに力を与えるしかありません。すなわち力を強者から弱者に移動させるのです。

最近の復興活動

ここで話を言語復興に移しましょう。言語復興のための努力は三つのレベルに分類することができます。ある言語が国家に認識されていない場合、例えば日本が琉球諸語を「語」として認識していないような場合には、活動家たちはまず、現在行われている政策を利用します。一例として、学校の総合的学習の時間に方言教育を行ったりすることが挙げられます。ただ既存の政策を利用することによって多少は琉球諸語の力を強めることができますが、それほど多くのことはできません。

反対に、新しい政策を始めることもできます。ここでは実際に行われている活動をいくつか紹介しましょう。沖縄県は、最近、県民が望む二〇年後の沖縄のあるべき姿、ありたい姿を描いた「沖縄二世紀ビジョン」を公表しました。そしてこのビジョンの実現を目指し、様々な施策を推進するための

せん。「はごー」という語幹となる部分をどこかで見聞きし、その形容詞形なので「い」をつければ正解だと考えて使用しているのです。このような混合語の一部は若者の間で非常に好まれているようであり、日常的な会話にもよく見られます。ただ、若者たちは琉球諸語の話者と呼べるほど琉球諸語を話せるわけではありません。またすでに述べたように琉球諸語はすでに家庭内でも使われていないような小さな言語です。では、琉球諸語の復興のためにはどのようなことをしたらよいのでしょうか。

人はそれぞれ、「言語イデオロギイ」、すなわち言語に対する考え方を持っています。例えば、日本では琉球諸語のことを方言だと言う人もいますし、言語だと言う人もいます。また、言語だという人の中にも琉球諸語は役に立たないという人もいれば、役に立つと言う人もいます。このように言語に対する考え方は実に多様です。こうした言語イデオロギイを基にして、「言語レジーム」と呼ばれる人々の言語使用や言語行動に関わる制度について計画が立てられます。例えば、琉球諸語やアイヌ語は学校で教えらるべきか否か、英語の場合はどうかなどについてです。英語であつても全員が必要とするわけではありませんし、様々な考えがあります。これらの考え自体はすべての人が持つことができます。しかし、中には他よりも影響力の強いものも存在します。例えば、私が

実施計画を策定しました。琉球諸語も「しまくとぅば（島言葉）」としてその計画に含まれており、保存・普及に向けた「しまくとぅば普及推進計画」が定められました。それによって「しまくとぅば普及センター」が設置され、関係機関や団体と連携を図りながら計画が進められています。県内の小・中学校では、しまくとぅばに慣れ親しんでもらうために作成された「しまくとぅば読本」を配布し、活用するなどの取り組みが行われています。さらに、民間団体による取り組みも見られます。その一つが二〇〇〇年に設立されたNPO法人「沖縄県沖縄語普及協議会」です。彼らはとても活動的で、学校を訪問して琉球諸語の授業を行ったり、琉球諸語の話者に対して講師養成講座を開催したりしています。また、九月八日を「しまくとぅばの日」（く（九）とう（十）ば（八）の語呂合わせ）とする条例の制定にも貢献しました。設立当初は小さな団体でしたが、今では大規模なイベントも開催しています。それ以外にも、「沖縄ハンズオンNPO」という団体も様々な活動を行っています。この団体は、もともとは沖縄における英語教育向上のために設立されましたが、現在は琉球諸語の教育を推進する活動も行っています。例えば、琉球諸語による公演を行ったり、琉球諸語によるラジオ放送を二四時間ストリーミングするなどの活動を展開しており、高い影響力を持っています。中でも面白いのは、自動販売機にスビー

カーを埋め込み、彼らのラジオ番組を流すもので、社会生活の中に琉球言語を取り入れるための工夫がなされています。その他にも、「沖縄語土曜日言語の楽(Okinawan Saturday Language Nest)」という沖縄の母親たちの会があります。この会では土曜日に子どもと一緒に集まり、活動のすべてを沖縄の言葉で実行してみるということをしているようです。これはマオリやハワイでの言語復興の活動からアイデアを得ています。また、比嘉亮龍(Hija Byron)氏など琉球語語の研究者や活動家個人による活動も盛んに行われています。さらに、書籍や論文の執筆、教科書の編集など、世界中の研究者による活動も広がっています。また、伝統的な琉球舞踊やエイサー、沖縄民謡なども琉球語と結びついており、深い沖縄文化につながる入口としての役割を担っていると言えるでしょう。

最後になりますが、多様化する世界を生きるためには、すべての人が手助けをするために手を差し伸べ、また手を取り合うことが重要となります。実際に活動をしなければ、また活動を行う人々を助けることがなければ、世界は変わることができないのです。

注

- (1) 講演会では実際に録画映像を上映した。ハインリッヒ氏のYouTubeチャンネルの一つである「wadoku2012」にて視聴することができる。

二〇一七年六月三日 開催「グローバル・リテラシーとは何か：マイノリティー言語と社会の視点から考える(第二弾)」

母語への意志 — アイヌ語復興と言語的モダニティ

マーク・ウインチェスター

■ 講演者……マーク・ウインチェスター(本学日本研究所専任講師)

■ 司 会……サウクエン・ファン

はじめに

私はアイヌ語の専門家ではありません。しかし、今回の講演会シリーズのテーマである「均質化が進む一方で、個々の言語文化の独自性がますます意識されるようになってきた」という、グローバル化の一側面、あるいはその力学とアイヌ語との関係については、意外と関心があることに気づきました。なぜなら、それは、現在「グローバル化」と呼ばれている諸現象より遙かに直接的な均質化の強制力をもったサハリン島(樺太)、北海道島、クリル列島(千島列島)の日本国による入植植民地化がアイヌ語に対して引き起こした衝撃と、その衝撃の事実への対処の仕方を何らかの形で自分なりに見つけようと考えてきた明治以降のアイヌの著述家たちの試み

とどこかで重なっているように感じているからです。

私はアイヌ語の専門家ではありませんので、これまでアイヌ語を積極的に学ぼうとしてきませんでした。「奪われた言語」に対して海外出身者の私はその専門知識を身につけ、それを一般に広めることに関して、多少の懸念がありました。これから紹介するアイヌ語専門の言語学者である奥田統巳氏がいうように、「アイヌ語の能力を身につけたいと考えるアイヌの人に協力するのは、もちろんアイヌ語研究者の社会的責任である⁽¹⁾」という考え方に私は共感を覚えます。ただ、そういう理由もありますが、私がアイヌ語をきちんと学んでこなかったもつとも基本的な理由は単に忙しかったからです。

私の研究の大まかな課題は、アイヌの近現代の思想史の構築です。私の思想史の先生の一人は、思想史のことを次のように説明します。人々が考える思想や哲学は、個体から離れて発生はしないが、思想そのものは個体に限定されることはない。この事実から思想史という学問の狙いが導き出されま